第３回米国理学療法学研修報告

筑波技術大学 保健科学部保健学科 理学療法学専攻

薄葉眞理子

要旨：国際交流委員会活動としてアメリカ合衆国アイオワ大学にて10日間理学療法学の研修に卒業生と在学生の４名が参加した。理学療法の海外研修は３回目であるが、初めて卒業生が参加した。研修内容は理学療法授業の参加、大学院生の研究活動の見学、病院や開業医院での臨床見学であった。研修を通して、最先端医療に触れ、海外の理学療法士や学生達と活発な意見交換を行った。

キーワード：国際交流、理学療法、卒業生、研修

1. はじめに

米国における理学療法研修は2005年から毎年実施し、第１回は４名、第２回は３名の学生が参加した。２回の研修経験より、卒業生にも学べる点が多い研修内容であることと、進行性の眼疾患を呈する場合、視力が少しでも残っている内に海外研修に参加したいという意見や、経済的理由から学生の間は参加できないため就職してからでも参加できるようにして欲しい、という意見もあったことから、第３回研修では初めて在学生と卒業生との合同研修を企画した。

参加者は限られた英語力を駆使して、アイオワ大学の学生と共に授業に参加し、病院では最先端理学療法の治療場面を見学した。また、学外でもピクニックや自宅訪問により、アイオワ大学の教員と学生達と交流した。

2. 活動目的

国際交流委員会のプロジェクトとして、アイオワ大学へ学生と卒業生を引率し、理学療法に関する情報交換・病院見学等の研修を行い、アイオワ大学の教職員および学生と交流し、最先端のリハビリテーション医学に触れ、在学生と卒業生との共同研修を通して専門性への向上心を高めることを目的とした。

3. 卒業生に対する研修参加募集案内方法

５月に卒業生へ案内を送付し、２名から参加希望の連絡を受けた。

4. 参加者（図１）

薄葉眞理子　理学療法学専攻教授（引率教員）
有安　諒平　理学療法学専攻１年
小坂　宗久　理学療法学専攻１年
石黒　章郎　筑波技術短期大学部理学療法学科卒５期生
　太田医療専門学校勤務
鈴木一士　筑波技術短期大学部理学療法学科卒６期生
　嶋田病院勤務

図１　参加者集合写真　アイオワ大学付属病院にて

5. 研修期間

平成19年８月24日～９月２日

6. 事前研修

参加する１年生の学生が米国と日本の理学療法の比較ができるよう日本の理学療法の現場を見学する必要があった。引率教員と共に学生達は臨床実習病院でもある勝田病院の理学療法にて夏休み開始前に１日見学をおこなった。

医学用語や挨拶程度の英会話について夏休み中に事前研修を計画したが、学生のひとりは海外在住の家族に会うために殆ど参加できなかった。卒業生に対しての事前研修は、拡大文字資料を郵送したが、墨字読書が困難で長時間を要する卒業生に対しては、引率教員が２回訪問し、読み上げや資料の追加説明を行った。

7. 出発日から研修開始日まで

初めて卒業生との合同研修であったため、出発日の集合場所について若干の配慮を要した。参加した学生２名は寄

宿舎以外に在住であるため、出発日の集合場所をつくばセンターとした。卒業生２名は、茨城県県北と群馬県内在住。卒業生のひとりは視力の低下によりスーツケースを持ちながらの電車移動が困難な状態であったため、前日に引率教員が卒業生を自宅まで迎えに行き、出発前日はつくば市内泊として、前日から共に行動した。もうひとりの卒業生は高速バスにて直接成田へ向かい、成田で合流した。空港ロビーに掲示されているカウンター表示「A」「B」「C」は見え難いことが当日判り、成田空港到着後、携帯電話にて連絡を取り合う方法で合流することが出来た。道路事情により高速バスが定時より遅れたため、卒業生が到着するまでの間、トイレへの誘導を引率教員一名で行うことに注意を要した。またカートはスーツケースを２名分乗せながら手引が可能であったため、空港内移動に便利であった。

機内でのトイレへは教員あるいは比較的視力の良い学生が手引きをした。一部の参加者においては、座席についているリモコン操作を誤って押すことが多いため、途中から使用することを控える結果となった。

米国入国審査では、審査官に弱視であることを説明しなければならない場面があった。

セキュリティーでは各自ベルト、靴、鞄を検査用の箱に入れ、パスポートと航空券を把持するが、皆、徐々に慣れてきた。しかし、ロサンゼルス空港の乗り換え時に卒業生が航空券を紛失したことに気づいた。残りの３名にはその場を動かない様に伝え、その卒業生を引率して空港内を探し回ったが、結局見つけることが出来ず、航空会社のカウンターにて再発行をお願いし、無事予定した飛行機に搭乗することができた。小物が整理しやすい手荷物鞄の準備が必要と感じた。

8. 宿泊

アイオワ大学キャンパス内にあるアイオワ大学直営のホテル「アイオワハウス」に宿泊した。ホテルではあるが、ここのレストランは朝食と昼食のみの営業期間中であったため、夕食はキャンパスの外に行く必要があった。

9. 研修内容

１）授業参加

授業開始時に各自自己紹介をしてから、授業に参加した。各授業は１コマが３時間半。１時間毎に10分程の休憩がある。異なる内容の授業に４コマ参加した。

① Principles of Physical Therapy Lecture

傾斜台を用いた治療について適応症、効果、注意事項、使用方法についてパワーポイントを用いた講義に参加した。

教員の教え方は言葉が明瞭で聞き取りやすく、改めて話し方の大切さを感じた。学生はまじめで、講義中の私語が無く、受け答えが良い（石黒）。

常に患者の状態を知ることで、計画能力、進行に合わせた治療が出来ることを学んだ。（小坂）

② Principles of Physical Therapy Lab（図２）

歩行分析と傾斜台の演習。筑波技術大学の参加者が２名ずつ学生達の小グループに入り共に演習を行った。

演習のグループ活動の進め方が上手で、一体感がある。これだけの内容に対して『解らない』『難しい』という意見が学生から出ない。（石黒）

学生達は明るい感じだ。言いたい事の５分の２しか言えなかった。（鈴木）

楽しかった。淡々と学ぶのでなく、解剖・生理は理学療法につながっていく事が判った。理学療法と直結した内容で興味がわいた。モチベーションが上がった。（有安）

図２　傾斜台に乗りながら血圧変化を測定する演習に参加

③ Musculoskeletal Therapeutics Ⅱ

肩に症状がある場合の理学療法についての講義。肩の解剖学的構造、機能、触診、多く見られる疾患、傷害機序について講義があり、症例検討として３症例が紹介された。学生はその症例について課題が与えられた。

④ 表面解剖学

講義のオリエンテーション。授業の進め方は、講師は表面触診のデモンストレーションを敢えて行わず、学生に課題を与えて発表させ、それに訂正・修正をかける方法で進めるという説明があった。その理由は、単に講師の真似をしていると触診技術は決して身につかないため、学生が考えなければならないよう工夫した、と説明を受けた。

2）アイオワ大学付属病院リハビリテーション科理学療法室見学

慢性腰痛外来（1クール5週間）を含む、広いリハビリテーション科の案内をKen Leo氏（理学療法士、リハビリテーション科主任）より受けた後、外来患者（内側半月損傷）への治療とのベッドサイドでの治療（交通事故受傷3日後、頭部外傷と火傷）を見学した（図3左）。見学後、日米の医療制度の違いについて意見交換を行った。アイオワの先生は卒業生達が話す日本の医療制度の利点と欠点について興味を示し、約束の時間を過ぎても質問を続けた。その後、病院の最上階にある古典医療展示室を見学。（図3右）

図3　左：交通事故による火傷と頭部外傷を呈した患者のベッドサイド理学療法を見学　右：古典医療展示室にあった古い車椅子

3）臨床研究見学

筑波技術短期大学理学療法学科の卒業生であり、アイオワ大学大学院在学中の井口君の研究を見学（図4）。センサーの固定方法に苦労する姿や、そのままでは出来ないと判って教えず、出来ないところを工夫させる指導教員とのやりとりを目の当たりにし、参加者に分かり易くH波や筋紡錘の説明をする先輩の活躍に、参加者一同感激した。

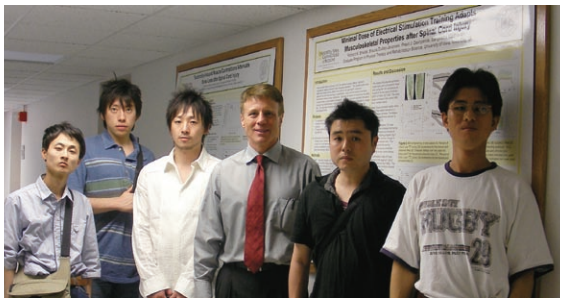

図4　井口君（右端）と指導教授Shields先生と研究ポスターの前で

また、他の大学院生の脊髄損傷発症2か月後から開始した電気刺激による筋委縮および骨密度低下防止の臨床実験を見学した。（図5）

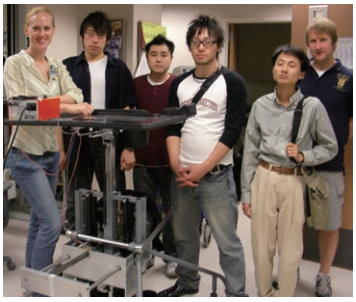

図5　研究室を訪問し手製の実験装置を用いたデータ収集の様子を見学

4）St.Luke's病院訪問

地域の中核病院であるSt.Luke's病院6階にあるリハビリテーション病棟にて、2班に分かれてshadowingを行った。（図6）ここには急性期ではなく発症後3週経過した回復期の患者が多く入院している。疾患としてはダウン症、糖尿、切断、片麻痺、脊髄損傷が多い。日本では見ることが出来ないような、肥満専用の病室、ベッド、車椅子、歩行器があった。

図6　shadowingで歩行訓練についている様子

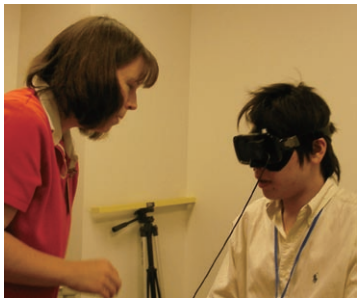

図7　Benign Paroxysmal Positional Vertigoに対する理学療法の診断と治療を体験しながら説明を受けた

Shadowing 後、アメリカ国内でも少ない Benign Paroxysmal Positional Vertigo に対する理学療法治療の専門家から、その治療方法について説明を受けた。（図７）

５）開業医院訪問

理学療法開業医院 Performance Therapies P.C. を訪問。ここで臨床実習を行っている理学療法生から治療室にある訓練機器やその場に居た患者の治療内容について説明をしてもらった。（図８）

図８　理学療法の開業医院を見学

６）大学生・職員・昨年度協力してくれた病院のスタッフと交流

市内公園にて理学療法学科主催のピクニックに参加した。昨年シャドーイングの指導を受けた大学病院の理学療法士、授業見学でお世話になった教授、会話した学生に再会。卒業生の井口君夫妻も一緒に参加。夏季休業中に行われた臨床実習について学生達が率直な感想を話してくれた。ピクニックではバーベキューや持ち寄った手料理が振舞われ、食後はアメリカンフットボールでキャッチボールをするなど、オープンで健康的な交流を行った。（図９）

図９　理学療法学科主催　公園でのピクニックに参加

７）大学院生（Shauna さん）宅を訪問

大学院生宅へ夕食に招かれた。途中、近代的生活を拒み、自給自足の生活を営んでいるアーミッシュが乗った馬車に遭遇した。Shauna さんの隣家である米国の典型的農家を見学した後、スペアリブやパンプディングなど手料理を御馳走になり、私達も肉じゃが、漬物、味噌汁、キムチ炒めを作った。（図10）

８）セミナー

２日に１回の頻度で、参加者が英語による研修内容を正しく把握しているかの再確認と明日の準備を兼ねたセミナーを１時間半ほどホテルで行った。風邪で体調不良になった教員に替わり、卒業生がデモンストレーションをしながら歩行に関する医学用語の説明をしてくれ、非常に助かった場面もあった。

図10　大学院生宅の庭にて

９）自然に触れる

アイオワへの途中グランドキャニオンに立ち寄りアメリカの大自然に触れ、アメリカの自然と共に歩んだ歴史にアメリカ人の人生観を重ねて考える機会を得た。（図11）

図11　スケールの大きさを肌で感じ取ったグランドキャニオンにて

10. 今後の課題

１）航空券紛失・病気発生時の体制整備

今回は航空券を紛失した参加者が出たり、プログラム参加に影響は無かったものの学生と教員各々一名が風邪により体調を崩した。そのようなアクシデントの際に敏速に対応するため、引率教員が２名になる体制の整備が必要である。

２）鞄について

参加者には持ち物の出し入れを容易にするポケットの多い鞄の使用を勧めたい。

３）待ち合わせ

見知らぬ場所での待ち合わせは、携帯を使用することで対応したい。

４）卒業生参加について

活動内容のレベルが高く、どちらかというと理学療法士として経験のある卒業生の方が理解しやすい内容である。しかし自立して職業に就いている卒業生に会って、意見交換することは、学生にとってまたとない機会であり、非常に良い刺激になった。今後も卒業生との合同活動を引き続き企画したい。今回参加した卒業生のひとりは専門学校の教員であったが、病院勤務の卒業生の場合、長期休暇を取り難いという問題がある。病院に対し海外研修への理解を求める活動が必要であろう。

11. 感想（全文参加者記載通り）

坦々と過ぎていく毎日の全てが学びであり、自身を構成する要素であると私は思う。身の回りで起こる全ての出来事は能動的なものと、そうでない受動的なものに分けられる。能動的な意思に起因される事象は、既に少し持っている知識やスキル、能力などを、その行動が慢性化している場合を除いて、飛躍的に向上させる。受動的な事象においては知識の有無にかかわらず、概ね多少の獲得やそれらの定着が成される。今回のアメリカ研修では、行く事を決めたのに能動的な意思があり、結果として海外に学びの場を求めるという今まで消極的であった行動を大きく改善できた。「海外」というだけで高い敷居を感じてしまっていた私はこの点において大きな学びを得ることができた。陸続きに他国のない日本の風俗は「海外」に対し少なからず不信感を持っているように思う、自分はアメリカで生まれたのにもかかわらず、そこに敷居を感じていたのには不自然な話だったと今になって思う。アメリカでは先生が用意して下さったスケジュールを受動的にこなしていった。アイオワ州立大学での講義は英語に疎い私にとっては、細かな内容の把握はできなかった。しかしここでの教育のプログラムの日本との差異や、学生の受講態度、授業の雰囲気の違いには驚いた。熱心に受講するアメリカの学生の姿は学ばなければならない要素の一つであった。病院の見学は、日本で予め先生が勝田病院に連れてって下さった事や以前に所沢の国立リハビリセンターに見学に行った甲斐もあり、日本との差異を肌で感じる事が出来た。日本でもアメリカでも当然個人差はあると思うが、PT と患者との距離がアメリカでは日本より近いと感じた。全体として医療のシステムが合理的で、早く治して早く追い出すというような冷たい感じすらするアメリカだったが、患者の PT、OT の呼び方にも表れているように現場では楽しげで暖かい印象を受けた。これは単に国民性なのかも知れないが日本で自分が現場に携わる時は今回学んだことを生かしていけたらと思う。今回参加したこのアメリカ研修は、懐かしさと新鮮さに溢れた本当に楽しく学びの大きい、有意義な研修であったと思う。連れて行って下さった薄葉先生には本当にお世話になりました。ありがとうございました。（有安諒平）

今回のアメリカ研修で体験したことは、今後の自分に大きな影響を与えた。理学療法という医療従事者を目指すことを誇りに感じられ、未来の自分を具体的に考える機会になった。まだ駆け出しの段階にあることもあり、医療に対しての考え方が漠然としている今を変えられたらという気持ちでアメリカ研修に参加することを決めた。すべての講義を英語で受ける、10日間異国で過ごすといった不安はあった。しかし現地の講義を受けて、今一番思い出されることは、何もかも新しく感じられたことだ。もちろん人を治癒する知識がまだないということもあるが。具体的には、アメリカの学生は医療に対する姿勢がとても真面目で、かつ積極的に感じられた。廊下のいたるところに学生や教授の研究成果が張り出され、学習意欲を掻き立てるような仕組みも見て取れた。実際の研究報告会に参加させていただいた時には、真剣な意見もありながら笑いもあるような、言ってしまえば和やかさがあるとは考えていなかったので驚いた。講義の演習では、説明を受ければ教授が退室しても自らが積極的に実験のプロセス、運動のメカニズムに取り組み、医療に対する熱意がくみ取れた。一人として半端な気持ちで入学していないのが、日本とは違う。実際の医療現場では、日本で見た患者とはまた違う患者に接する機会となった。ダウン症の女性、頚椎に生まれつき損傷のある女性など。リハビリ内容はそれぞれ違いのある方

達なのに、時間の効率化なのか慣れなのかは分らないが作業していくにあたって無駄がなかった。今回の研修では、日本よりアメリカの技術は進んでいる面が多々見られた。そのような部分が良いかどうかは判断できる段階にないけど、患者は治っているという紛れもない成果が報告されている。三年後や、臨床経験を積んだあとにもう一度研修に参加したいと思った。その知識を日本で、あるいは世界で使えるように精進していきたい。（小坂宗久）

米国における理学療法や教育の現状の一端を垣間見たことで、日本の現状（私の知っている限られたものですが）との、違いや新しさに刺激を受けました。とくに私は現在、理学療法士養成施設にて勤務していることもあり、講義・演習授業を通じで、主体性を持った教育、明るく活発なやり取り、自然と相手を思いやれる雰囲気というものを感じ取りました。また施設見学などでは、規模の大きさやさらに進んだ個別的対応（時間的、物質的）、またその一方では、理学療法に対しても医療保険制度による強い制約や責任を感じました。さらに変わった取り組み（先進的）としては、いくつかの新聞や雑誌での報道はありましたが、ある種のめまいに対する理学療法と慢性疼痛に対する運動療法プログラムを見学でき興味を持ちました。ほか、日本を離れて海外という別の地ですごしたこと、そのものにも新鮮さを覚える限りです。まとめとして本研修により、自己啓発、今後の教育指導への一助となったことと思っております。（石黒章郎）

今回アメリカにおける理学療法の現状を養成学校や病院、開業施設などを見学し肌で感じることが出来た。これは私自身非常に興味深く、また、貴重な経験となった。それは今のアメリカの理学療法が近い将来、日本の理学療法に多大の影響を与えると歴史的に見て考えられるからである。もともと理学療法はアメリカから来たものであり、考え方や保険制度などいろいろ将来の日本に反映されていくと思われる。また、個人的には開業理学療法施設に興味があった。これについて施設や治療現場の見学、質問をする事ができ、非常に価値ある経験になった。将来的に開業したいという具体的な想像がより強く浮かんできた。それと同時に努力して知識技術を身に付けていく必要があると感じました。それと国民性だと思いますが、アメリカ人達の‘明るさ’を非常に感じました。これは我々理学療法士にとって必要不可欠な要素であると思います。これからは自分の仕事に、そして生活にも念頭に入れて‘明るく元気よく’でやっていこうと思います。今回の研修で卒業生である自分と在校生が一緒に研修に行く事ができた。これは私のような卒業生には現在の学生の考えや気持ちを知り得る。また、自分が理学療法士を志した時や学生時代の気持ちを思い出し、もう一度原点に帰るといった点で利点があると思います。自分とは違う視点からの質問や考えを聞くことでより知識が深まるのではないかと思います。経済的な面や日程などまだ問題点はあるかと思います。しかしながらこの研修が我々視覚障害がある者にとって、知識の視野を広げたり、異国の文化を肌で感じる点など健常者が研修に行くより得るものが多く、貴重な経験になることは確信できるものであります。これからも是非続けていって欲しいと考えます。最後に今回、いろいろな人にサポートしてもらいながらアメリカの理学療法の現状を研修することができて本当に感謝しております。ありがとうございました。I had a nice induction. I had a nice time. I gratitude everybody, thank you!（鈴木一士）

12. 得られた成果

米国の最先端の理学療法が熱心に且つ明るい雰囲気の中で行われていることを肌で感じることができた。参加者は日本よりも幅の広い理学療法に接し、徐々に視野を広げることができるようになった。卒業生と在校生との合同研修により、異なる視点からの意見交換が活発に行われ、在校生は生涯教育の重要性を理解した。在校生にとってこれからの学業や専門職に対する意欲につながることと思われる。

参考文献

[1] 薄葉眞理子：第１回アメリカ合衆国理学療法研修報告. 筑波技術大学テクノレポート14巻：225-229, 2007.

[2] 薄葉眞理子：第２回アメリカ合衆国理学療法研修報告. 筑波技術大学テクノレポート14巻：231-2235, 2007.

National University Corporation Tsukuba University of Technology Techno Report Vol.17 (2), 2010

The Third Physical Therapy Field Trip to the United States of America

USUBA Mariko

Course of Physical Therapy, Department of Health,
Faculty of Health Sciences, Tsukuba University of Technology

Abstract: Two second year students majoring in Physical Therapy, two physical therapists graduated from Tsukuba College of Technology, and one faculty visited the Graduate Program in Physical Therapy and Rehabilitation Science held at the University of Iowa and its affiliated facilities in the region during the period between August 24th and September 2nd, 2007. The program included attending classes and performing physical therapy treatment by shadowing the therapists at the University of Iowa Hospitals and Clinics, St. Luke's Hospital at Cedar Rapids, and at Performance Therapies, a private facility. The students and the graduates were exposed to English as a medium of study and learned the latest, different approaches in the practice of physical therapy; most of all, they were immensely impressed by the dedication of the students at the University of Iowa.

Key words: International relations, Physical therapy, Graduates, Field trip